

## 生命のにぎわい通信

第 69号 : 令和 6年 (2024年) 1月 発行

発行 : 千葉県環境生活部自然保護課  
生物多様性センター〒 260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2  
(千葉県立中央博物館内)

TEL : 043-265-3601 FAX : 043-265-3615

URL : <https://www.bdcchiba.jp/monitor-index>E-mail : [monitor@bdcchiba.jp](mailto:monitor@bdcchiba.jp)

## 冬場、カメはどこにいる？

春から秋にかけて河川や池でたくさん観察できたはずカメたちの姿が、いつの間にか見えなくなっていました。多くの餌生物（昆虫等）がいなくなり、寒さが厳しくなる冬はカメの活動性が鈍くなる時季です。水に流されないよう、植物に覆われた浅瀬の泥中、川岸の横穴、淵に溜まった落ち葉の下等に隠れてじっとしています。外気に比べて温度変化の小さい水中は、乾燥や捕食者（哺乳類等）からカメを守ってくれる好適な越冬場所になっています。今号では、カメの越冬環境や冬季の出会い方について紹介します。\*写真左下は撮影者の団員番号です。

植物下の泥中



植物に覆われた浅瀬（白矢印）はクサガメやカミツキガメが隠れ家や越冬場所として利用します。水草の下にそのまま隠れているよりも、水底の泥中に潜り込んでいることが多いです。そのため、手探りによって泥まみれの個体を見つけます。

川岸の横穴



水路や河川の岸にできた横穴（白矢印）はニホンイシガメだけでなく、外来種のクサガメやカミツキガメも隠れ家や越冬場所として利用します。ときに、数個体が密集した状態で見つかることがあり、カメたちに好まれる形状の横穴があるようです。

淵にたまった落ち葉の下や岩の隙間



淵に溜まった落ち葉の下や岩の隙間もまたカメの越冬場所や隠れ家として利用されます。丘陵地を流れる河川の上流・中流を中心に生息するニホンイシガメは、このような場所を越冬環境として利用することがありますが、外来のカメはあまり利用しません。

手探りでカメを見つける



カメが隠れていると思われる場所に手を入れ、カメを探します。写真は浅瀬を覆う植物をかき分け、泥の中に潜り込んでいるカメを探している光景です。主に外来種のクサガメ（ごくまれにカミツキガメ）が見つかります。水底に隠れているため、多くのカメは泥だらけの状態です。その一方で、在来種のニホンイシガメは川岸の横穴や淵に溜まった落ち葉の下で越冬することが多く、泥に覆われていない綺麗な状態で見つかることが多いです。

なお、外来種のアカミミガメは河川下流部や溜池等の深場で越冬していることが多く、上記カメ類と比べ、冬季に探し出すのは困難です。池の水を抜いた後、池底にいる個体が見つかるケースがあるようです。

ニホンイシガメ(在来種)



クサガメ(外来種)

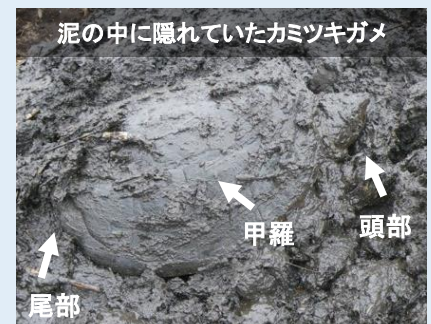


撮影 : a0826

カミツキガメ(外来種)



泥の中に隠れていたカミツキガメ



**注意点** : カメたちは厳しい寒さを水中で耐え忍んでいます。観察後は速やかに元の場所へ戻してあげましょう。また、探す際は土地管理者の了解を得た上で、畔や水路等を崩したりすることのないよう配慮してください。なお、手探りでカメを探す際は怪我や事故等に合わないよう注意しましょう。

最新の生物多様性に関する情報や各種講習会の情報は当センターと調査団のホームページをご覧ください  
調査団 : <https://www.bdcchiba.jp/monitor-index> 生物多様性センター : <https://www.bdcchiba.jp/>



# 古典文学と里山の生き物たちの世界



## 第二十三回 ニホンイシガメ

*Mauremys japonica* イシガメ科

詩人 大島 健夫

日本の古典文学には、様々な生き物たちが様々な形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生き物とかかわり、その姿に何を見ていたのでしょうか。この連載では、生物多様性センターに勤務している、ポエトリー・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、<sup>いのち</sup>生命のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

こんにちは、日本国内の淡水に生息する主要なカメのうち、カミツキガメはもちろん外来種、アカミミガメも外来種です。クサガメも近年の研究によって外来種である可能性が高いとされています。ということは、かつての日本の水辺には、基本的にはニホンイシガメとニホンスッポンしか棲んでいなかったということになります。

ところが、文献を紐解いてゆくと、<sup>りよくもうのかめ</sup>「緑毛亀」あるいは<sup>みのがめ</sup>「蓑亀」というカメが散見されます。甲羅に緑色の毛がふさふさと生えているカメ、というのです。平安時代初期の『続日本紀』や鎌倉時代の『古今著聞集』には、そのようなカメは縁起が良いものとされており、朝廷に献上されたりした旨の記述が残されています。昔はそんなカメがいて、現在は絶滅してしまったのでしょうか。それとも、想像上の生き物なのでしょうか。

実は、そのどちらも違います。この緑色の毛は、マリモなどと近縁のバシクラディア属の緑藻類の一種であり、淡水生のカメの甲羅に付着、生育することがあるのです。緑毛亀を瑞兆であるとする思想は古代に中国から輸入され、奈良時代の日本にはすでに定着していました。ニホンスッポンの甲羅には生えないので、文献に出てくる緑毛亀は、ニホンイシガメであったと思われます。



画 小林遥香

幕末になってもこの思想は生きていました。尊王の志士として知られ、吉田松陰にも大きな影響を与えた高山彦九郎は、ある日、知人から「琵琶湖で捕まった緑毛亀をもらったよ」という手紙を受け取ります。彦九郎はこのカメを御所に持参して時の光格天皇に献上すると、光格天皇は大いに喜び、

はかりなき 千尋のふちにすむ亀は <sup>よろずよ よわい</sup>げに萬代の齢なるらし

という歌を詠みました。計り知れない千尋の淵に住むカメは、まことに万年も生きてきたものだろう、というのです。この一件で、彦九郎は天皇に拝謁を許され、カメは仙洞御所の池に放たれたといえます。しかし、記録によるとこのカメは長さ二寸七分、つまり 8cm ちょっとしかなかったということですから、万年も生きてきたものではなく……どうやら本当は、まだ若いカメだったのです。

### <これからの季節に観察できる生きもの>

- 調査対象種：イタチ、キジ、ウメ、サクラ、ニホンアカガエル(卵)など
- 調査対象種以外
  - \* 渡りのシギ・チドリ類、コガモやトモエガモなどのカモ類
  - \* ホソミオツネトンボやカメノコテントウなどの越冬する昆虫類

調査対象種以外は種の同定が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。

### 「生命のにぎわいフォーラム」のご案内

生命のにぎわい調査フォーラムを開催します。調査団員の活動報告や写真コンテストを行いますので、多くの方のご来場をお待ちしています。

日時：令和6年3月2日(土) 午後1時～4時

場所：千葉県立中央博物館 講堂

定員：先着100名・参加無料(事前登録が必要です)

### 同時開催！ 生命のにぎわい写真コンテスト

詳細は当センターのホームページやチラシをご参照ください。